こんなにも切ない殺人者が、
かつていただろうか。
17才の少年が望んだものは、
平凡な家庭とありふれた愛。
しかし現実は、それさえ許さなかった。
蜷川幸雄 監督作品
青の炎
二宮和也　松浦亜弥　鈴木 杏
唐沢寿明　竹中直人　／　山本寛斎　中村梅雀　秋吉久美子
原作：貴志祐介(角川文庫刊)　音楽：東儀秀樹
製作総指揮：角川歴彦　企画：江川信也　脚本：蜷川幸雄／宮脇卓也　プロデューサー：椿 宜和／道祖土 健
撮影：藤石 修　照明：渡辺三雄　美術：中澤克巳　録音：中村 淳　編集：川島章正　ライン・プロデューサー：藪下 隆
製作：「青の炎」製作委員会［角川書店／アスミック・エース エンタテインメント／ジェイ・ストーム／東宝／博報堂／東芝／アップフロントグループ］　制作：トスカドメイン　配給：東宝
東宝　阪急東宝グループ　DOLBY SR　202721-202　©2002「青の炎」製作委員会

世界の“NINAGAWA”が描く

— 17才の魂の鮮烈な輝きと挫折 —

STORY

「僕は人間じゃないって…。
でも世の中には笑って
やり過ごせないこともあるんだ。」

櫛森(くしもり)秀一(二宮和也)は湘南の高校に通う17歳。女手ひとつで家計を担う美しい母・友子(秋吉久美子)と、素直で明るい妹・遥香(鈴木杏)の三人暮らし。その平和な生活を乱す闖入者が出現した。十年前、母が再婚し、すぐに離婚した男・曾根(山本寛斎)だった。家に居座り傍若無人に振る舞う曾根から家族を守るために、秀一は法的手段に訴えるが、大人の社会のシステムは秀一のささやかな幸せを取り返してはくれなかった。一日中酒を飲んだくれているのみならず、母の体にまで手を出そうとする曾根に秀一の怒りは臨界点に達する。法の力も及ばず、話し合いも成立しない相手に、秀一は自らの手で曾根を殺害することを決意する。

インターネット上の裏サイトや法医学の専門書から収集した情報をもとに、秀一は「完全犯罪」のシナリオをねりあげる。美術の実習時間の間に教室を抜け出し計画を実行する秀一。ガールフレンドの紀子(松浦亜弥)に微かな不審をいだかれたこと以外はアリバイ工作も完璧だった。しかし、完璧に思えた犯行にもいくつかの小さなほころびが。鋭い直感で事件性を感じていた担当刑事の山本(中村梅雀)も粘り強く捜査を続けている。秀一の窮地を察した紀子は彼を救おうとするが、秀一はますます孤独な戦いの深みへと追いこまれていく…。

(上映時間1時間56分)

“僕は独りで世界と戦っている。”

INTRODUCTION

「芸術映画を撮るつもりはない。
正統なるアイドル映画を撮りたい。」
(蜷川幸雄)

貴志祐介の「青の炎」(角川文庫刊)は、少年が犯罪に手を染めその心理がどう変化していくかを精緻に描き現代日本の「罪と罰」と評された。同氏の著作の映画化は、「黒い家」(99年)、「ISOLA 多重人格少女」(00年)に続き3本目。名作ミステリーを原作に演劇界の世界的巨匠・蜷川幸雄が21年ぶりにメガホンをとったのが映画「青の炎」だ。

メインキャストに抜擢したアイドルたちについて蜷川監督は、「現在のアイドルは勉強熱心で演技に関しても優秀。ファンの視線を常に浴びながら競争の中で生きているたくましさもある」と語る。その言葉通り彼らの才能を120%引き出し、ガラスのような魂の震えとそれが壊れていく姿の美しさを鮮烈にスクリーンに焼きつけた。

「青の炎」は「義父殺し—17才の少年の完全犯罪」というショッキングな題材をモチーフにしたエンターテインメント性豊かなサスペンスであると同時に、青春の光と影が激しく交錯するストレートな青春映画でもある。世の中が閉塞感に覆われた現代だからこそ、この映画の中での現実の理不尽さに対する若者たちの孤独な戦いは、必ずや観客の魂を鷲づかみにして揺り動かすにちがいない。

3月15日(土)
全国東宝洋画系ロードショー

阪急・HEPファイブ東南カド・シネマ横丁 **OS劇場**	06(6311)2478	
なんば・ビッグカメラ北向い南OSプラザ5F **千日前OSスバル座**	06(6213)1851	
京阪・浜大津駅前アーカス4F **浜大津アーカスシネマ**	077(527)9616	
近鉄・布施駅西へ2分 **布施ラインシネマ10**	06(6781)1567	
JR伊丹駅よりテッキ直結・ダイヤモンドシティテラス4F **伊丹TOHOプレックス**	072(778)3773	
新京極四条上ル三筋目東入ル **美松劇場1**	075(221)4645	
神戸ハーバーランド・オーガスタプラザ9F **abシネマ**	078(360)6010	
堺東銀座街 **堺シネマ**	072(232)3166	